



「自己肯定感」と「自己有用感」を育む

校長 筒井 啓介

昨今、様々な国際的な調査で、日本人の「自己肯定感」の低さが指摘されています。「自分はダメだ、自分は役に立たない、どうせ頑張ってもうまくいかない…」など、自信が持てない日本人が多いとの報告がされています。

「自己肯定感」とは自分の価値や存在意義を肯定できる感情のことです。「自尊感情」と同じ意味で使われることもあります。「自己肯定感」が高い人は、ありのままの自分を認めることができ、他者のことも認めることができるといわれています。また、自分に自信が持てるので困難な事にも諦めず取り組んでいくことができます。是非とも、子どもたちに育てたい感情です。

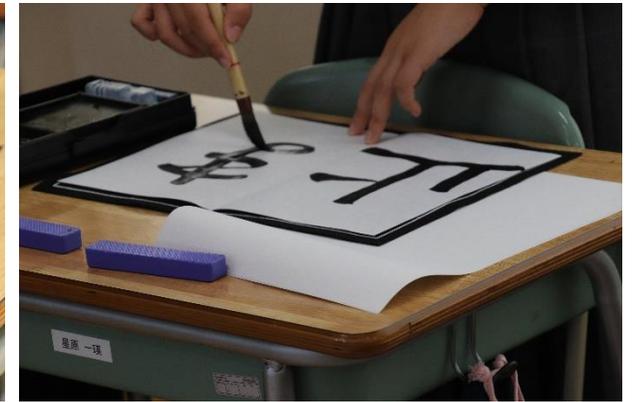
一方、「自己有用感」は、誰かの役に立っている、貢献している等、自分が有用であると思える感情のことです。誰かに必要とされた、人に喜んでもらったなど、他人の存在なしでは生まれない感情です。この点で「自己肯定感」や「自尊感情」とは異なります。

ところで、「自己肯定感」が高ければ「自己有用感」も高いかといえば、必ずしもそうとは限りません。「自分は能力があるのに、周りが認めてくれない。上手くいかないのは、親や学校、周りの人たちの責任だ。」と、他人に責任転嫁する人がいたとします。これは、自己肯定感だけが低い例です。また、走るのが得意な子がリレーの選手に選ばれたとします。「自分はクラスで一番足が速いので、クラス代表として選手に選ばれた。だから、みんなの期待に応えられるように頑張りたい。」これは、他者から認められ、期待されているという「自己有用感」を伴った「自己肯定感」です。単に「クラスで一番足が速い」という自信ではなく、他者のために自分の力を発揮したいという思いが高まっているのです。つまり、本人にとって足の速さは、さほど重要なことではないといえます。このように、「自己肯定感」を高めるには、まず、「自己有用感」を高めることが大切だと思います。人の役に立つ、相手に喜んでもらう、子どもたちにはそんな体験を多く積んでもらいたいと思います。

今、西谷中では10月の文化発表会に向けて、書道パフォーマンス、合唱、学年発表の取組みが日々進められています。リーダーの生徒や生徒会執行部を中心に、44名の生徒と教職員が膝を突き合わせながら取組みを進める中で、「自己有用感」と「自己肯定感」を共に高めていけるように、校長として支援に努めていきます。

■書道パフォーマンスの取組み（3年生）

書道パフォーマンスの取組みが着々と進んでいます。足立有里さんを講師にお招きし、各自が実際に書く文字を毛筆で練習しました。書き上げた文字も添削していただき、みんな笑顔一杯でした。更に練習を積み上げてから、パフォーマンス用の大筆で書く練習に入ります。（9月18日）



全神経を集中して書き上げます



お手本を見ながら集中して書きます



添削していただきました



どれが一番うまく書けていますか？

■里山学習の様子2（1年生）

1年生が里山学習の一貫として、中学校の側の里山で実習を行いました。西谷里山活用実行委員会・山もり山里の皆さんと兵庫県農林水産部治山課の皆さんから、鋸や剪定鋏の使い方を聞きながら、安全に注意して作業を進めました。長袖体操服にヘルメットをかぶり、暑さと格闘しながらの作業ですが、貴重な体験ができました。ご指導いただいた皆様には心からお礼を申し上げます。（9月11日）



暑さに負けず作業に取り組みました



最高の笑顔で記念撮影